毎月1回　25日発行　　第3種郵便物認可（昭和31年3月28日）　①

山と博物館

第4巻　第9号　1959年9月25日　大町山岳博物館

ムクドリ　夕闇のせまる飯綱山を背景にコムクドリを含むムクドリの大群が流れるように渡つて行く

山岸哲撮影

知床半島を探る（2）

ハイマツの中の10日間

C隊　高橋秀男

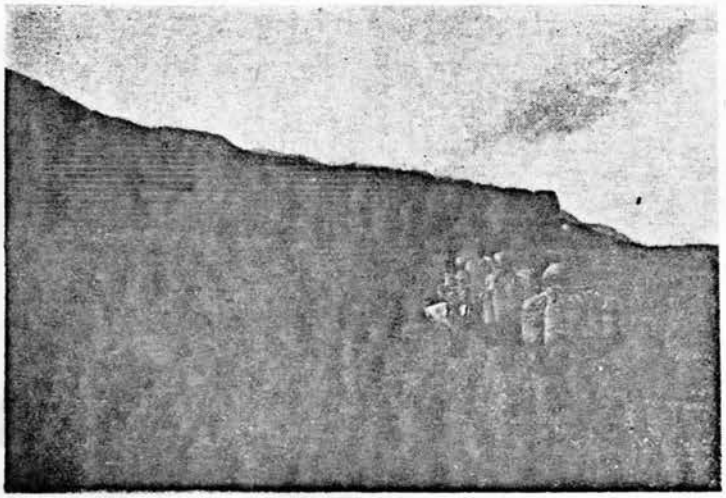
20日起床　3時30分　出発5時30分

岬の段丘に密生したクマザサは、背丈と同長、昨日の偵察隊の残されたわずかな痕跡をたよりに、山麓にせまる原始林をめがけて進む、朝露で下半身は水に浸つたようだ。いよいよ標高200mの尾根への登りになる。ミズナラ、エゾイタヤ、カシワ、イチイ、下草はシラネワラビ、マイズルソウ、ツタウルシ、チシマザサなどの中を今日はできるだけ距離を稼せがねばならない。昨日の偵察折返点（標高200m）のピークに到着したのは6時20分、ここからはナタとブッシュの闘いである。

それでも早大4名の古いナタ目や、更に400m付近では庶路山岳会のブリキ板標識があつたりして古くは道開きがしてあるので、行動はさして困難とは思われない。ヨブスマソウ、トガスグリ、ミヤママタタビのブッシュの中で、アレルギー体質で皮膚の弱い私にとつて特に目立つのはツタウルシで、それがわかつて避けようと思つても、ひどいブッシュの中ではその自由も与えられず、体に触れるにまかせるより仕方がない。その結果は夜になつて顔、手、足などに症状が現われ、カユくてたまらない。早稲田山の会がこの縦走の時に「5人の中でこの禍から逃れ得たものは皆無で、その後十数日間に亘り、熟睡を妨げ、幾分行動は制約された」と記している。

けれども本隊でかぶれたものは私一人で、それもたいしたことなく幸いであつた。ここでもヒグマがオオウバユリの根を掘つたあとがあり、藤沢隊員が豆腐屋より借りて来たラッパが威力を発揮した、金切声のホイッスルよりは趣があつて愉快である。400m位から我々の最も苦手であるハイマツの顔がみえだす、これをできるだけ避け、尾根通しにあるいは尾根を捲きながら、小さないくつかのピークを通過して600m峰まで、距離にして約4K進み、わずか平担な草地をデポ地点にきめた、デポする品はクマを警戒して、缶詰、天幕、薬品など匂いのないものばかりで、簡単な穴に入れビニールシートで覆い、その上に防虫剤を散布した。一日行程4Kの山は北アルプスでは容易に想像できない。しかも猛烈なアルバイトにもかかわらず、水らしきものは一滴もなく、持参した水だけではとても足りず、水不足は苦痛であつた。疲れ果てて……その帰途思いがけないルバング島モドキの小事件が起きた。藤沢、伊吹、竹端リーダーがクロスズメバチの巣をふんだらしく、鼻、脛などさされたのである。「泣き面に蜂」そのものである。さらに藪蔭にのたうちまわる蔓に幾度となく足払いをくわされながら、番屋についたのは6時近かつた。冷い湧水をボールにくみガブガブのみほして、やつと生き返つたような満足を覚えた。それも束の間、夕食後明日の行動を考える隊員の顔には憂うつな陰がただよつていた。あらゆる悪条件をこく服してただ前進あるのみである。

予期していたことでも、さあ長期間の縦走に「生命の水」が一滴もないとなると、悲壮な決意で渇とブッシュの闘いにいどまねばならないであろう。最大量の水の運搬計画を立て、天水を期待し、最悪の場合には沢筋に水を求めて行動を助けねばならない。



知床岬を行くC隊

21日　銅乱はポリエチレンの袋に詰めた水で満され、なお器という器はみなつめこまれ計18リットル、3日間という目安で出発したのである。はや200mのピークから渇きを覚え、流れ出る玉のような汗にたまらなく水がのみたい。けれども水の配当は限られているので、植物の実や一昨日の切株、ヨブスマソウなどの茎にたまつた水を発見しては喜び、ツーピッチに一回くらいの割合で配給して貰うコップ半分の水を唯一の楽しみとした。昨日のブッシュ刈が意外に効を奏し、デポ地に着いたのは2時。汗をぬぐう間もなく竹端リーダー、伊吹隊員が明日の偵察に出かける、救急薬品のブドウ糖など注射液は水分補給に一役買つた。

蒸し暑く寝苦しいその夜、みな空を見上げては雨の降るのを期待し、夜はウワ言に「水がなければねむれない」と云う隊員もあつて、後々まで笑いの種になつた。雨に神経を使つていた竹端リーダーは、パラパラと云う音をいち早く耳にし「おーい、みんな雨だぞ」その声に全員はね起き外に出たが、何のただ露が落ちた程度で空は晴れている。一同しょんぼりと渇いた口を唾でぬらしてまたシュラーフにもぐりこんだ。忍耐が必要であつた。

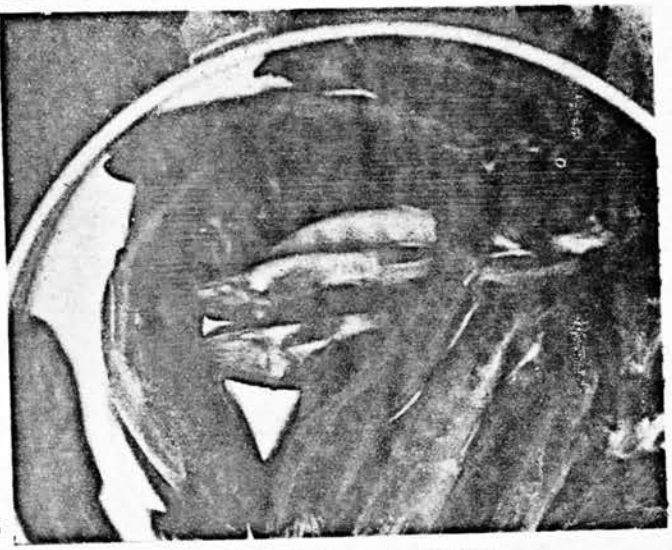
22日　4時起床　出発6時15分

昨夜雨に備えて大きく広げておいたビニールシートには一滴の水も見られない。北見側に這つたイチイのブッシュをわけ、ここで、はじめて想像していた広大なハイマツを根室側にトラバースしなければならない。ハイマツは長さ15～20m、高さ3m位に立ち、すごいのは径30cm余り、内地のアカマツが横這いになつているといつても大げさではない。以後隊員は「立松」というネームを与え脅威の的であつた。極北の寒冷な気候と海岸より絶えず吹きすさぶ風に適応した強靱な、そして鋭い枯枝をもつハイマツの原始林では人間は物の数ではない。枝から枝へ、間隙から間隙へと前に立ちふさがる枯枝は容赦なく体を刺し、衣服を傷つけ、青い枝は目の玉にはねかえり、涙を流しての前進である。もし枝を踏みはずせば、背中の大きなザックがハイマツの枝にかかり、人間は宙ブラリンになつて人の助けを求めねばならぬこともままあつた。

エネルギーの消耗の著しい割合に遅々として前進できず、一時間の斗争の末、辛くも抜けでることができた。ポロモイ岳（651m）は根室側を捲くことにし、エゾマツ、ダケカンバの林に繁茂するツタウルシをわけ、ギッシリつまつた、1.5mのチシマザサの中を直登し、ポロモイ岳と640m峰の鞍部に出た。

ブッシュの中のアルバイトは猛烈に水を欲求し、3日間と予定した水も超過し、水が縦走成功の可否を握るだけに深刻な問題になつて来た。途中、暑さで無駄な汗を防ぐために、1時間ほど休息をとり4時30分アウンルイ川に近い沢の源頭にテントサイドを設けた。なぜなら水を補給しなければこれ以上縦走は疑問視させられたからである。明日は一日停滞し、アウンルイ川まで水を求めに行くことにした。もし得られなければ海岸まで……。やはり沢筋だけあつて藪蚊が執念深くつきまとい水源が近いことが推測されて喜しい。用意して来た防虫網や、防虫剤は最大の効果を現わす。

23日　5時40分　水源めざして沢筋を下ること40分にして「おーい、水だ水だ」とトップの歓声が上り、小踊りして喜んだ。夢にまで見た水にありつけたのだ。薬類が良く成育し、オオメシダなどシダの群落やオオブキが林をなす、その陰に最高の水源が得られた。今まで水がほしくてたまらなかつたのだが、いざとなるとなかなか飲めないもので、スープ、紅茶と手をかえ品をかえ、腹につめられるだけつめ、更に持つて来た器に25リットルの水をとつた。さあ元気はでたし水不足は解消された。11時20分テントを撤収し、ハイマツの海にとびこんだ。ハイマツの密生しているところでは、日射がないためか、その枯葉だけで下草はまつたくない。ときどきアスヒカズラ、ミツバオオレン、タカネスギカズラなどに限られた下草がある。ハイマツ遭ぎの下りは、枝から枝へとのりうつるスリルを味わいながら快調に進むことができる。このあたり5万分の1を開くと稜線より根室側は、非常に開けているが、実はこの緩斜面はハイマツとエゾマツのジャングルであり、ときどき間隙を作つているのがダケカンバである。786m、760m峰を捲き、952m峰とのコルにダケカンバの繁る好適のキャンプサイドを発見する。今日から3日間、予定された発音筒を打ち上げる第一日目である。この遠い鞍部でしかも風が手伝つて知床池にいるB隊には及ぶまいと思うが、荷を少しでも軽くしたいし、始めての好奇心もそそり、5時物凄い音響とともに、大空高く白い煙の塊が二つ、風でオホーツク海側に流された。知床岳は雲をかぶり風も相当あり明日の天気は心配だ。



ルサ川で釣れたイワナ

24日　4時起床　案にたがわず朝から雲行激しく風も強く、5時頃雨はやつて来た。5時50分出発、952m峰を捲きはじめる。雨にびしょぬれ、その上視界5mのガスでは、正しいルートを見いだすことはむづかしく、10時行動1K余りにして打切り、設営する。全身ズブぬれ、休むと寒さが襲う。早速石油ストーブで暖をとる。水はいくらあつても良い。停滞はしたけれど、めぐみの雨にテント上のビニールシーツの溜水で飲料水、炊事用の水はとれた。夕刻より海岸線が現われ、雲の合間にも青空が、明日は晴れるぞと喜びに湧いた。

25日　起床4時20分

行動に移つて間もなく、稜線にでてびつくりさせられた。と云うのは稜線通しはハイマツが薄く、風のためだろうか背丈も低い。ガレが出ていたりして、今までのハイマツに比べたら、登山道にでも比敵するような尾根に、これなら相当時間が稼せげるだろう。ガレ場近くには、エゾイソツツジ、エゾツツジの散り終つた中に、チシマギキョウ、イワヒゲなどが岩に付着していて、岬以来はじめてのこの美しい高山植物に興味が引かれる。地図の上では、この馬力とピッチで行けば、今日一日にして知床池まで足を延ばせるかもしれないという明るい希望がもたれる。がやはり道なき道故そう簡単にはいかない。

やがて待望の992m峰に立つて、眺望をほしいままにすることができた。知床岳の裾に拡がるポロモイ台地、その中に金魚の形をした知床池を発見した時には本当に感慨一しお深いものがあつた。計画通り進んでいたらB隊は992m峰まで道を切り開いていてくれるはずであつたのが、どうも予定通り進行していないのではないか。もう一つの鞍部を越せば良いし、大半下りである。今日の行程17K、予定の5時には発音筒を打上げ、ポロモイ台地を目と鼻の先に、野営地を設けることができた。

26日　起床4時

早朝「ヤッホー」の声が対岸の台地からこだまして来た。残りの一本の発音筒を合図に皆でテントをとび出し応答した。2・3の人の群がハイマツの中を見えかくれしながら、我々を迎えに来てくれるのがよくわかる。

B隊と喜びの合流をし、水と菓子の類を腹につめ、我慢に我慢を重ねた煙草に火をつけることもできた。行動2時間余にして、ついに8時、福島隊長、大野副隊長らと初踏破成功の感激の握手を交すことができた。知床岬に立つて実に7日間、今水とハイマツの闘いが終つてみて、いかに自然は冷たく酷であることか。

高千穂商大も早稲田山の会も熊路山岳会も、皆このハイマツと水とデッカイザックに苦しめられ完全縦走を果し得ず、日本に〝未踏の地〟としてこん日まで唯一つ残されていたのである。今回の心配された最難コースにも凱歌が上つたのだ。その激戦の跡は、クツ底も痛み、シャツも単に布切れでしかないほどの破れかた、眼鏡や時計の紛失など悪戦苦闘の日々を物語つているかのようだ。この知床池、人呼んで「ロマンチックな池」と称したけれど、実際未踏のしかも人知らざる北国の池だと思えばこそ、尚さらその景観にはほれぼれとするものがある。ハイマツに囲まれた湧水の池、そこに写し出される知床岳、周囲にはクロバナボウシ、エゾキスゲ、ツルコケモモ、チシマツガザクラなどのお花畑に、最適のキャンプサイドである。がしかしあくまで蚊がいないという仮定の上であつて、本多記者は「この蚊が何んとかならぬ限り知床の山の楽しい印象も蚊の思い出に消されてしまいそうだ。名コックが作つたごちそうをトイレの臭気が満ちたところに並べたようなものだ」と。

明日の計画が決つた。シュラーフも持たないサブザック一つの軽装備で、でき得る限りの馬力とスピードで、目的地ルサ川源流のユルに羅臼岳から縦走して来ているA隊に合流するのである。途中一泊は覚悟でツエルトザックにビニールシート、食糧は準備された。メンバーは少数精鋭でB隊から山田リーダー、山池隊員、C隊から融合した藤沢隊員と私、それに本多記者で構成された。

27日　午前4時30分　朝焼の知床池を後にした。ウナキベツ川を遡つて知床池に前進キャンプを出したB隊によつて、つけられた道を1時間でとばし、再び岬からの縦走を思わせるジャングルへとび込んだ。ブッシュは時折切れ、ワタスゲ、チシマコザクラの湿地に、その周辺にはチングルマ、アオノツガザクラ、エゾノツガザクラなど梅池にも似たお花畑、沢状の溝ではダケカンバ、クマイザサの歩き易いルートがところどころにあり、時間は隨分助かつた。M峰では前景にガレた硫黄山の雄峰がそそり、ふりかえれば、たつた一カ所に残雪を持つ知床岳、両サイドには根室海峡とオホーツク海が押寄せ、半島の中の山にいることを再認識する。このピークに立つた時「ヨカタプリ」（タプリはアイヌ語で「山」の意味、だから良い山と云う意味になる）と命名した。知床岬という地図を見て誰でも感ずることであるが海岸線を除いては内部には、まこと地名が少ない。時間のメモにもしばし手まどうことがあつた。そんなところから〝秘境、知床〟の一端が伺えるが、その反面動、植物の採集地を記録する上からどうしても重要な地点には命名する必要もあつた。知床峠、ポロモイ台地など……。沢状の溝はヒグマも歩き易いらしく湯気の立つ糞があり、シラネワラビを押し倒して逃げ去つた踏跡が続いている。

今まで笛を持つて殆んどといつてよいくらい吹いたことのない私も、幾つも並ぶ糞を見て吹かずにはいられない程緊張する。特にトップにあつては、その不安は大きく「もしも」の大事を考えれば、自然笛は口にもつていかれる。また夕暮どきのヒグマは採食活動も盛んなので注意が必要である。

ダケカンバの木登り、登つた木から次の木へ移る曲芸をしたかと思うと、こんどは大木をくぐり抜けたり、アーッというまにハイマツに覆われた岩穴に落込んでみたり、とかくヤブ漕ぎは個人プレイである。でもトップと歩調を合せ、おさえ込んだハイマツの足を次の者がバトンタッチを受け、更にオーダーに従つてこれを繰り返せば、順調に前進することもできる。

高千穂商大は我々と同じコースを反対のルサ川からウナキベツ川まで11日間を要して縦走しており、1日前進1.5Kのために一カ所のキャンプ地に2日滞在し、道開きとポッカのために使つている。そこを軽装で1～2日で突走ろうというのだから多少アルバイトになるのも無理はない。今日は是が非でも、A隊のキャンプ地まで行くのだとリーダー以下そのはり切り方は格別だ。暗くなつてはいずことも果しない樹海との勝負はできない。たとえ背丈以上でもクマイザサの時の喜しさは例えようも

なかつた。合泊沼付近の780mピークのハイマツ台地を3時間もかかつて抜け、ルシャ川源流のコルに続くササの群落の中では、もう足もとはわからない暗さだ。ササにかくされて横たわる大木など目につく筈もなく、ピッチを上げていたトップが突然背負投を一本くわされた。ヘッドランプをたよりにルシャ（もともとルサとルシャはアイヌ語で「ルエシャニ」浜へおりて行く道という意味で語源は同じだが地図では根室側をルサ、北見側をルシャと記して区別している）の源流をオオブキにつかまりながら下りはじめたのが7時40分。A隊のいるルサ川コルを電池と笛で真暗闇の地形をさぐる。10時ルサ川コルについた。A隊の応答なく山のようなヒグマの糞と一緒に火をあかあかと燃やしつつ、ゴロ寝である。今日一日の歩行15K、17時間30分の行動であつた。

28日　起床4時

その朝、キジ打ちに行つた私はせゝらぎの中に意外な音に驚ろいた。イワナが群がつてピチャピチャやつているのを発見したからである。それを他の隊員に知らせたら「サア大変」、ミヤマハンノキの枝などでイワナ釣りに朝飯を忘れるしまつである。そのはず、20分にして20匹余りも釣り上げてしまうくらい人ずれのしていないイワナだつた。北アルプスの谷々も、その昔はこんな状態だつたんだろうか、あえて外敵といえばヒグマくらいだろう、私たちがヂート見ていても逃げない。あわてて逃げたとしても、石の下だなとわかれば、両手でつかめる。そのはな先へ川虫の餌をさげてやるとパクリとやる。それを上げるといつたような繰りかえしで内地のドジョウの如きである。可愛らしい純情なイワナの気持にもなつてこの処女地を永久に保護してやりたいものだ。（自分では夢中で釣つているのに）ルサ川コルに出るもA隊には会う事はできなかつた。もつともA隊は一つ南のコルで待つていたので合流するはずもなく、30日宮崎、小池隊員がこの間200mのこのコースを埋めるために縦走に向つている。ルサ川源流は落岩で良くすべり、容赦なく転び、泥まみれになつてしまつた。

さてまたここでもイワナ釣りの話になり恐縮、小さな滝に続く四メートル四方の池にイワナが黒く群がつている。釣りがはじまつた。私は釣りといえば、只一回コイを釣り上げた経験しかないし、糸の結び方すら知らない。ところがここでは釣りのテクニックは問題にならないし、私のような短気なものでも面白くてしかたがない。ただ糸に川虫か紙切れ、毛針を落してやれば、何んの苦もなく必ず、釣れるのである。サオは不用、糸を手で持つていただけで充分。やがてコッフェルは一杯になり、昼はそれの塩焼に舌鼓をうつた。腕に覚のある本多記者も「釣りはふんいきを楽しんでつるのだが、ここでは全然興味が湧いて来なかつた」といつていた。秘境〝知床〟の名に恥じないイワナも豊富な資源開発と相まつて、観光〝知床〟が実現すればその時には、この原始性に富んだ面影はみじんもなく消え去るのであろうと残念でたまらない。

かくて予定通りの行動は全部終了し雨のため定期船がでなかつたB隊は30日に遅れたが、全員30日の夜には羅臼に集結、採集品の整理と梱梱に終始した。採集品は藻類、菌類にはじまり、地衣、蘚苔類から高等植物まで、動物では微生物、昆虫、両棲類、鼠などあらゆる部門に採査会隊員は縦走のかたわら活躍。手当り次第集めた。また秘境知床半島の全山縦走も果し得た。今高等植物2000点は大町山岳博物館で整理されており、明年3月には採集回録を作るように同定を急いでいる。なお本稿を終るにあたり、隊長福島博物教授を始め横浜市立大学探査会、同山岳部の諸氏並びに市当局、博物館、公民館、教育委員会、観光課の職員、さらに大町山の会の会員にはなみなみならぬご援助を得たので紙上をおかりして謹しんでお礼申し上げます。

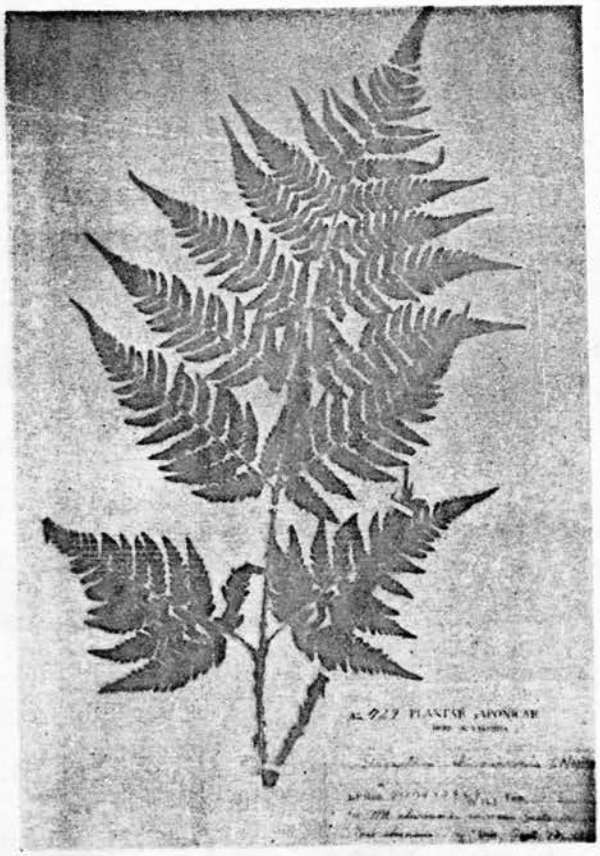
（山博学芸員補）

縦走後ボロボロの記念撮影

シロウマイタチシダにちなんで

中村武久

白馬岳といえば、わが国の高山植物の宝庫として知られているのはいうまでもないが、その種類が豊富なことと同時に、それ等の植物の研究の歴史が長いことがあつてか、白馬岳ではじめて発見され、命名された植物はこれまた他に比類がないほどである。これについては本紙第3巻7号に書いた通りであるが、この今までの白馬岳にゆかりの深い植物を通観するに、これらはすべて美しい花をつける、いはゆる高山植物のみであつて、植物すべてではなかつた。私が10余年前、シダ植物に興味を持つようになつて以来、これほど植物が豊富でしかもここ白馬をタイプにもつものが多いにかかわらず、なぜ他の下等な植物についてはシロウマを名にもつものがないのだろうか、こう不思議に思つたのも無理からぬことだつたと思う。以来天然記念物指定地区内で採集こそできなかつたが、白馬に登るたびにシダ植物で何か変つたものがあるのではなかろうかと、人目をしのんで一生懸命観察したものだつた。



シロウマイタチシダ

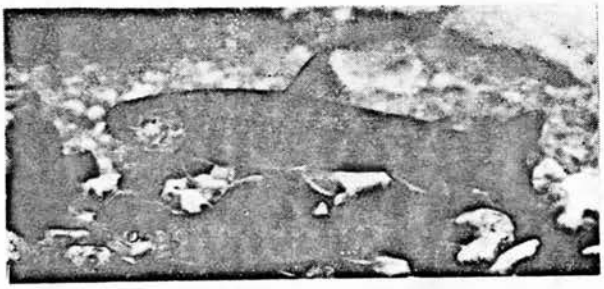
しかし当時の私の知識では、新しいものを発見するどころか、すでにわかつている種類を正確に区別することさえなかなか困難だつたのである。そして数年を過ぎ、今からちようど5年前、1954年7月、東京の山仲間を白馬岳に案内したおりのこと、白馬から鑓にで鑓温泉を経て二股に下る途中、どこでかしらぬが、日頃のクセがでたとみえ、シダの葉を一枚とり手にもつていた。勿論この時は登山だけであり、植物を見ようという心掛は毛頭なかつたので採つたものをどうするわけにもゆかず、結局もつていたノートの間にそのシダを小さく折りたたんで挟み持ち帰つたのである。これが新種シロウマイタチシダ Dryopteris shiroumensis Kurata et Nakamuraとは勿論知るよしもなかつたのだが、しかし、後に考えて見ると、あゝして一枚のシダを大事に持ち帰つたということは、多分少し変つたものだがと思つて採つたに違いない。ともかく帰つてからいろいろ検討して見たが、今まで知られている日本のシダでこれに当るものがどうしてもない。結局この途の師である東大の倉田先生のところへ行き相談することになつた。ところが変りものということがわかつても、たつた一枚のしかも不完全な標本である。そこで翌55年夏、完全な標本を得るために南股に登つて見たが、何分にもどこでとつたのかわからぬために遂に見つからず、そこで又同年9月再度南股入を試みた。この時はようやく、鑓の雪渓まであとわずかという地点、標高約1500mあたりの草叢の中に比較的大きな株となつて点在しているのを発見した。この時の喜は今なお忘れられないものとなつている。このシダは一見北ア山中のブナ林下のいたるところに見られるシラネワラビによく似ているが、細かな部分について観察すると、やはり北ア山中に普通に見るミヤマイタチシダにどつちかといえばよくにているもの、写真で見てもわかるように葉の裏のソーラス（粒状に見えるもの）が羽軸に沿つて両側に一列に並ぶなどいろいろな点で明瞭な特徴をもつている。分布については、この白馬が第一の産地で、昨年の黒部調査の際、御山谷出合で見つけ、これが第二の産地で、現在のところいまだ他に産地を知らない。ともかくもこれでようやく白馬岳のフロラにシロウマの名をもつ下等な植物が一つ加えられたことは喜しい限りであるはもとより、むしろこんな大きな立派な形状をもつシダが今までになぜ発見されなかつたのかと不思議に思うくらいである。思えば植物研究の歴史の長い白馬岳にもかく新しい植物がみつかつたということは、なを山容険峻・谿谷をきわめるここ北アルプス山中には、まだまだ人知れず眠りつづけている植物もいくつかあるに違いない。

（山博学芸員 東京農大付高）

イワナ

長沢　武

イワナと云えば、誰一人として知らない人はないでしよう。しかし、実際に泳いでいるイワナを見た人は少ないと思います。一口にイワナといつているこの魚も、この道に入つて長い間研究しておられる大島博士によれば、日本には四種類のイワナがいるそうです。カラフトイワナ、エゾイワナ、イワナ、ミヤベイワナがそれで、カラフトイワナは、別名オショロコマといい、樺太、北海道のオホーツク海に面した川におり、エゾイワナは樺太、北海道、それに本州では、日本海に注ぐ川と、利根川以北の太平洋に注ぐ川にいる。イワナは本州に普通のもので、島根の高津、山口の岩国、太平洋側では和歌山、奈良県が西および南限のようです。またミヤベイワナはカラフトイワナと中間種で北海道に広く分布しているそうです。イワナといえば川魚の王様、平地には棲まず、山村や山の中の渓流で水温 C18° 以下のところに棲み、性どお猛なる半面、小心で神経の細かいところがあります。カエルサンショウウオ、ヘビ、さては友喰いさえも辞せず、一たん見つけた餌はおどりかかつて喰いつき、一度くわえたら絶対に離さない。何時も流れに向つて餌の流れて来るのをうかがつているが、鳥の影や人間の影、足音だけでこの魚は餌を喰わなくなつてしまいます。ですからイワナ釣りの人は、白い着物を嫌い、下流からしのび足で姿勢を低くして、長い竿で釣るわけです。イワナの喰物は、カゲロウの仲間、トビゲラの仲間、カワゲラの仲間などの幼虫が主で、夏には水上に飛来するこれ等の成虫、甲虫、蛾類、アリの仲間など広く捕食します。



9月に入るとイワナはぼつぼつ産卵期となり、10月まで続きます。流れのゆるやかな小砂利のある渓流に尾鰭でスリ鉢状の穴を堀り、そこに卵を産みつけます。産卵中は餌をほとんど食べず、産卵が終る10月下旬頃は、すつかりやせ細り、産卵で各鰭はすつかり切れあわれた姿となります。イワナはこのように川で卵を産み、一生川で生活する魚ですが、実は大昔はそうではなかつたようです。

イワナは、サケやマスの仲間ですが、この仲間は北海魚なのです。日本にも氷河時代がありましたが、その頃海から川に遡上して卵を生み、海に下るというマスの一種であつたイワナがその後地球が暖かくなり、日本の近海も水温が上つて生活できなくなり、山奥の冷たい水の所にとじ込められてしまい（陸封され）今日のような終生海に下らない魚ができてしまつたのだと学者はいつております。ですからイワナは氷河時代の、残存動物または、遺留動物でもあるといつております。近年発電所のダムや、砂防堰堤ができて移動できなくなつたり、彼等の棲む所が狭くなつたことはまことに残念なことです。

（山博調査員 白馬村役場）

コサメビタキ

長沢修介

ツバメの姿はもう稀にしか見られない様になり日毎に木の葉が黄味を帯びてあふれるほどにぎやかだつた森も今は静まりかえつて数えるほどしか鳥の姿も見られなくなつた。多くの小鳥達はもう渡りを始めてわずかに残つているのはスズメなどの留鳥だけ。気の早い漂鳥か旅鳥などがぼつぼつ姿を現す此頃、この鳥は立派に成長した雛共々渡りの前の一時、餌あたりに一生懸命だ。

かつて親鳥が渡つて来た時は、この辺りはまだ木の葉が出始める時で巣を作つたあの枝は芽吹きの頃でほんのちよつびり黄緑の葉がのぞいている時だつた。そして夫婦で協力してあの枝にコケを集めて作つた枝のコブの様な巣に馬毛を敷いて五個の少さな青味がかつた灰色の卵を産んだ。それからの毎日は雨の日も暑い日も毎日卵を抱いた。やがてかわいらしい雛がかえつた。丁度あの枝の葉がのびきつた頃だつた。それから毎日餌運びに追われ巣の囲りの葉が暑い日射をさえぎつてくれる頃苦労が実りまだヨチヨチではあるが雛は巣立つた。その日から雛を連れ毎日餌を教え敵を教え休む暇さえなかつた。

今立派に成長した雛を見て親鳥は考へる。「もう教えることは何もない。体も一人前だ。これから立たねばならない長途の旅にどうか最后迄無事であつてくれるように」と……やがて彼等は秋と共に南へ旅立つた。

蘚類の見分け

平林昭一郎

暑い夏もまたたく間にすぎ、1年を通じ最も快適な時節となつた。蘚類の採集は年中必要とされているが、特にこれから翌春にかけて、子のうの成熟するものがかなり多いから、この時期の採集もぜひ行いたいものである。

(5) ヨツバゴケ科ヨツバゴケ属の蘚類

ヨツバゴケ科の蘚類の特徴は、蘚歯が4個（まれに3～6個）で蘚蓋の組織から分離した多数の全細胞からできていることである。

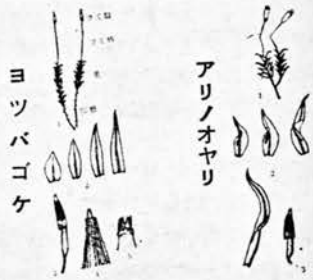
日本には、ヨツバゴケ、アリノオヤリの2種（ヨツバゴケ属）とコヨツバゴケ（コヨツバゴケ属）の2属3種が知られている。

ヨツバゴケは上部が鮮緑色、下部は赤褐色のため「チキノアカゴケ」ともいわれ、アリノオヤリとともにやや薄暗い多湿の朽木上に生育しており、最も一般的な蘚類である。

種類の見分け方の要点は右表のとおりである。（引用図書「日本の蘚類」「日本隠花植物図鑑」「岩波講座生物学苔蘚類」）

（学芸員）

	ヨツバゴケ	アリノオヤリ
さく柄	褐色 高さ 1.3～2.0cm 真直、平滑	褐色 高さ 1.0～1.5cm ほぼ中部より〝く〟字形に膝曲下方は平滑上部はいぼ状突起が密にある
蘚帽	長く、さく胞の約½をおおう。基部の分れ方が深くほぼ中辺まで達している。上部の隆襞は高く、鋸歯がよく発達している	短く、基部の分れ方が浅い 上部には隆襞、鋸歯は発達しない。
蘚歯	褐色、長く、鋭く、尖る	濃褐色、より長く、より鋭く、尖り、厚い



今年の文化祭

博物館、公民館、市役所、商工会議所、秋香会などが中心になつて華々しく開催される〝大町市文化の粋〟を集めた文化祭のシーズンが今年も訪れて参りました。ただいまその準備をすすめておりますが、その計画のあらましをご紹介し、みなさんのご協力を得たいと思います。

「お国自慢民芸展」最近は〝民芸ブーム〟とまでいわれ、全国各地に民芸熱は高まつております。この機会に全国各地の特色ある民芸品を一堂に集め、展示しようという企画をたてました。この収集は全国都道府県、市町村長あて依頼してありますが、なおみなさんで収集されている方がありましたら、期間中出品されるだけで結構ですから、博物館「お国自慢民芸展」の係まで10月20日までにご連絡下さい。なお主に展示されるものは、郷土玩具、人形、特産品、お土産などで、ご一報あれば、要項をお送りします。

「針ノ木自然園展」針ノ木に関する観光、山岳、自然などをいつさいを網羅した針ノ木岳に〝モデル山岳〟をかたどり、未来の自然園の構想を画く予定です。

「自作スライド、8ミリコンクール」一般から自作のスライド、8ミリを公募し、期間中一般公開し、審査しようというわけです。趣味を持つ方の多数応募を期待します。

お願い　本紙の購読ご希望の方は**1カ年購読料170円（郵送料とも）**を現金書留または**郵便替為、郵便切手**で**長野県大町市、大町山岳博物館**あてご送金下さい。　**大町山岳博物館**

資料寄贈（敬称略）

チウサギ 1体 白馬村 **松沢三郎**、チウダイサギ 1体 南安有明村 **下星農夫**、フクロウ 1体 大町市館ノ内 **堀田舘治**、アナグマ 1体 大町市平 **丸山喜美男**、ヤマセミ 1体 松本電鉄 **宮沢寅男**、コネバチ 1個 大町市上中町 **福島園枝**、ノスリ 1体 北安八坂村 **吉原治末**、ニッコウムササビ 1体 松本電鉄 **遠山巨雄**、タヌキ 3体 松川村川西 **近藤喜三雄**、ウソの卵 3個 大町市五日町 **小林茂**、イタチ 2体 大町市平 **吉沢文平**、ツバメ（白化）1体 大町市常盤 **清水守人**

編集部から

ご愛読のほどお礼申し上げます。発刊以来4年となりました。この機会にさらに内容、編集ともに一段と充実した紙面にいたし、みなさんの「山と博物館」として育成したいと存じます。編集や内容に対するご意見やご希望をぜひ博物館までお寄せ下さい。

山と博物館　第4巻第9号　1959年9月25日発行
発行所　長野県大町市　TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　長野市岡田町 176
第一法規出版株式会社